
魔法少女リリカルなのは 魔女は悪魔と共にあり

混沌の渦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 魔女は悪魔と共にあり

【コード】

N9996M

【作者名】

混沌の渦

【あらすじ】

神の暇つぶしのために転生！？でも本人はすごく楽しんでます！

この小説は駄文の集合体です。ご注意ください。

プロローグ（前書き）

やっちゃん！勢いに任せて書いてやっちゃん！どっしょよっ。

プロローグ

「おい、お主、今すぐ転生しろ。」

は？

私の名はあれ？思い出せない？なんで？学校や友達の話は覚えて
いるのになんで？

「転生する者に前世の名は必要ないからじゃ。」

「ふーん、てかあなたは誰？あとなんで私は転生するの？」

「わしは最高神じゃ。お主が転生するのはわしらの暇つぶしのため
じゃ。」

「はあ！？そんな理由で私は転生するの！？ふざけるな！！」

「まあ、そういうな。お詫びにお主の好きな世界にチート能力をも
つていかせてやる。」

「え？そうなんだ。なら、リリカルなのはの世界で。」

「ふむ、分かった。能力はどうする？」

ふふん、私が要求するのはこれよ！！

1 魔力SSS並

2 私が考えたオリジナルを含めて悪魔の実を5個

3 不老不死

4 王の財宝

5 戦いの経験

こんな所かな？

「ふむ、分かった。」

「あ、あと、私の容姿は銀髪碧眼の妙齡の女性で！」

「よし、では行って来い。」

「て、やっぱり落とし穴なのねー！」

こうして私は転生した。

プロローグ（後書き）

おそらく不定期になります。

キャラ・アイテム設定(前書き)

文字通りです。

キャラ・アイテム設定

主人公

名前 アルトリア・ブリュンスタッド

某騎士王の名前と某真祖の姫君の名字からとってつけた。容姿は銀髪碧眼の妙齡の女性。

ものすごいプロポーションの持ち主。

アイテム

悪魔の実

メラメラの実

ヒエヒエの実

グラグラの実

上記の三つの実は原作から。この先オリジナル。

イヌイヌの実モデル九尾 動物系幻獣種 九本の尾から炎を出せる。

ムシムシの実 超人系 体が無数の虫で構成されている。なお、体そのものが一つの虫というわけではないので動物系ではない。

王の財宝

主にエクスカリバーを使用、それ以外はあまり使わない（エクスカリバーが一番好きだから）

キャラ・アイテム設定（後書き）

こんな所でどうでしょう？

第一話 原作破壊するぞ！（前書き）

最近熱いですね。

第一話 原作破壊するぞ！

主人公 s i d e

落とし穴からやつとこさ脱出したら、そこは森だった。

「どこなの？ここ。ていうか、いつ頃なんだろう？」

うーん、困った。場所はともかく時代がわからないのはマズイ。だって原作ブレイクができないじゃない！ん？なんか落ちてる。

「手紙だ。何々？『ハロー、神じゃ。めんどうだから簡単に書くぞ。今は原作のA、Sの第九話の少し前じゃ。それからお主から頼まれた悪魔の実が王の財室の中じゃ。それじゃあ、がんばりたまえ。』なるほどなら早速、『王の財室』！」

私は早速王の財室から悪魔の実を取り出す。そして、どれを食べるか思案する。イヌイヌとムシムシは原作キャラに食べさせるために考えた実だからパス。うーん、……よし！グラグラの実に決定！世界を滅ぼせるほどの力だ。私が管理するのが一番のはず。では、早速！

「いただきます！モグモグ・うん、おいしい。」

フッフ、実は神に頼んでおいしくしてもらったのだ！さらに！副作用であるカナツチも無し！替わりに体の成長に異常が出るが。これはどうやらそうしないといけない決まりがあるそうだ。

「さて、食べたことだし、早速原作キャラと会おう！」

さて、もう夕方だし、ん？夕方？てことは今はお見舞い中か。なら、夜を待つとしよう。なのはちゃんたちのピンチに颯爽と登場！
これだ！

じゃ、それまで力の確認でもするか？いや、戦いの経験があるから不要か。じゃあどうするか。うーん、ん？もう夜だ！いかん、急がないと！

十分後

よし、到着。既に結界が張られている。という事は、第十話の辺りか。うん、今はどうでもいいな。とりあえず侵入するか。

「『約束された(エクス)』」

剣を上段に構え、

「『勝利の剣』カリバー！」

振り下ろす！よし！穴があいた。今の内に。

「さーて、なのはちゃんたちはどこかなー。ん？げ、スターライト
ブレイカー！」

ヤバイ。どうしよう。あ、そうだ、すずかちゃんとアリサちゃんを助けよう！えーと二人はあ！あそこだ。よし、

「その二人ー。」

「え？だ、誰ですか？」

「ちょっとあなた、何者？あとこの状況、どうなってるのよー！」

うーん、アリサちゃん、やっぱりツンだなー。て、そうじゃなくて、

「はいはい、二人とも、積もる話もあるだろうけどそれはお友達に聞きなさい。」

「ちょっと、それどついう意味？」

「それは、ん？発射された！『ロー・アイアス』！」

「え？な、なにが起きてるの？」

「きれい。」

よし、余裕でガードできる。

「あー、すみません。」

ん？この声は！

「あなたは何者ですか？それと、その花（？）はなんですか？」

キターーーー！！なのはちゃん、フェイトちゃん、百合コンビキターーーー！おっと、質問に答えないと。

「私はアルトリア・ブリュンスタッド。通りすがりの魔女で、これはロー・アイアスという宝具よ。」

「……ま、魔女!?!」「……」

フフフ、驚いてるな。ちなみに名前は某騎士王と某真祖の姫君から。

「ハイハイそこー、呆然としてないでそっちの二人を安全圏に転送しなさい。あと、あなたたちも早くここから離れなさい。でないと、」

「……」で、でないと?」「……」

「食べちゃうかも?」

軽く殺気を出す。

「……」ヒ!」「……」

「わかつたらさっさとやる!」

「……」りよ、了解!」「……」

何故か四人とも敬礼。まあともかく、これで全力が出せる。淫獣とアルフは賢いから大丈夫だろう。さて、それじゃあ、

「闇の書、私と戦いなさい。」

「……お前は何者だ?何故、私の邪魔をした。」

「別に邪魔をしたつもりはないけど、あえて言うならば、ハッピーエンドのため。」

「・・・は？」

「だから私はハッピーエンドのために戦う！くらすえ、『約束された勝利の剣』エクスカリバー！」

「！盾！」

フッフ、そう簡単に防げるものか！

「な、なに！？グハ！」

よし、決まった！じゃあ次だ。

「今度はこれだ！震碎拳！」

ぶっちゃけ唯のパンチ。ただし振動付き。防御不可だ。

「グア！なんだ、今の攻撃は！？」

「教える理由は無い！」

さて、そろそろはやてちゃんがかするだろう。ならば！

「これでもくらいなさい！」

私は両手を竜の頭を思わせるかのごとく合わせてそこに魔力を集

約する。ぶつちやけダイの大冒険のドルオーラだ。でも私のはそれにそれに回転を加える。名付けて！

「ドルマグナム！」

ズドーン！結論から言おう。威力がありすぎる。海に着弾したがものすごい量の海水が吹きあがって雨が降った。

「ふ、ふえー！」

「すごい。」

「ありなの？」

「規格外だ。」

ん？後ろを見るとなのはちゃん、フェイトちゃん、アルフ、淫獣がいた。

「あれ？どうしているの？」

「ど、どうしてって、放っておくわけにはいかないから！」

「それに、あなたが何者なのか聞かせてもらわないと。」

なるほど、そういう事か。でも、今は、

「あー、ハイハイ、そういうのは、アレをどうにかしてから。」

私が海面を指さすとちょうど闇の書の闇が現れた。

第一話 原作破壊するぞ！（後書き）

だめだ。グダグダだ。

第二話 能力が危険すぎる（前書き）

あらにチートに。

第二話 能力が危険すぎる

さーて、はやてちゃんの登場を待つか。

「あの、」

「ん？なに？」

「あなたと話したいという人がいるんですけどー。」

「ん、ああ別にいいけど。」

「そうですか。でははじめまして、次元航空艦アースラ艦長リンデ
イ・ハラオウンです。突然で悪いですけど、あなたは何者ですか？」

空中にモニター（？）ぽいのいきなり出してそれか。まあ、妥当
な質問だね。

「さっきこの子たちにも言ったけど、私は悪魔と契約せし魔女、ア
ルトリア・ブリュンスタッド。それ以外にはなりえない。」

悪魔と契約はぶっちゃけ悪魔の実を食べたし、当たっているよう
なものでしょう。

「魔女って、非現実的ですよ。」

む、信じてないな。なら、

「あー、ハイハイ、そんなに疑うなら証拠を見せてあげる。『海震』

「!!」

はい、ネタに走り白ひげのまねごと。

「ふえ!? ヒビが!?!」

「な、なんで?」

「ああ、空中じゃあわからない? 今地震を起こしたの。」

「え? なにを言っているのですか。地震は自然現象ですよ。それを人の手で。」

「じゃあ、あっちに見えるのはなに?」

そう言い沖の方を指さす。その先には、

「え!? まさか津波!? なんで結界の中で!?!」

「私が地震を起こしたから。海で地震が起きたら津波は発生するの。」

「

「そんな事より、こっちに来た! どうするの!?!」

「そりゃ、どうにかするの。」

「どっやって!?!」

右手に魔力を込め、

「こつするの！カラミティウォール！」

振り抜く。バーンの技のパクリだ。

「ふ、ふえええー！？」

「ありなの？」

はい、見事に津波と衝突、相殺。威力弱めだからねー、この程度か。まあ本気で出したら地形が変化しちゃうだろうけど。

「どう？私が魔女だと理解できた？」

「ハ、ハイ。」

「まあ今はそんな事よりお友達の心配を、あ、どうやら来たみたい。」

フッフ、あの名シーンがついに！おお、光と共に現れるヴォルケ
ンリッター。そして、

「我ら夜天の主のもとに集いし騎士」

「主ある限り我らが魂尽きる事無し」

「この身に命ある限り我らは御身の元あり」

「我らが主夜天の王八神はやての名のもとに」

「夜天の光よ我が手に集え祝福の風、リインフォースセーットアッ

プ！」

おお、やっぱり生で見るのは違う。

「はやてちゃん！」

「はやてー！」

「うんうん、感動の再会だね。」

「「「「誰？」「「「「」

あ、はもった。

「通りすがりの魔女。」

「魔女って、そんなあほな。」

「現在進行形で魔法少女をやってる君が言っても説得力皆無だよ。」

「う、たしかに。」

「まあ、私の氏素性はともかく、今はアレをどうにかしないと。」

闇の書の闇を指さす。

「たしかにそうだな。」

出た。KY執務官クロノ。

「ま、後は腕利き執務官に任せて、私はこれで！」

「おい！散々暴れてそれか！少しは手を貸してくれ！」

「散々暴れたから帰るの。さっき私の力は見たでしょう。これ以上暴れたらこのあたりの地図を書き換える事になりそうだから帰るの。じゃ、そういうわけだから、バイバイ、また逢う日まで。」

「あ、コラ！話はま・・・」

KYは無視して多重転移。さて、どこで寝るかなー。

第二話 能力が危険すぎる（後書き）

次回でまたチートに。

第三話 またチートな・・

あの後には原作通りに闇の書の闇は破壊され、はやてちゃんが気絶したのを見て寝た。そして、夢の中で・・・

「何でお前がいるんだ！神！」

「まあまあそつたぎらずに。まずは話を聞け。」

「わかったよ。で、要件は？」

「お主にさらなる能力を授ける。」

「ふーん。どんな能力？」

「瞬間移動と治癒能力じゃ。」

「詳細を教える。」

「まず、瞬間移動は一度でも行った事のある場所ならどこでも行けるようになる。逆に行った事のない場所は行けない。治癒能力はあらゆる病気やけがを瞬時に治せる。ただし一日5回しか使えない。」

「ふーん、そうか。どうやって使うの？」

「瞬間移動は行きたい場所を頭に思い浮かべるだけ。治癒能力はキヌをする事じゃ。」

「おい、なんでキヌなの？」

「そうすれば原作キャラとキスが簡単にできるぞ。」

「あーそうか！やったー！」

「じゃ、これで。」

「うん、ありがとねー。」

「あ、それから目が覚めたらミッドチルダに移動してるから。」

「ちよ！？それを先に・・・」

言い終わる前に消えた。そして起生。そこは森だった。

「ここは・・・郊外の森のようね。ふむふむ、これで私はいつでもミッドに来れるわけか。」

どうやら私がいつでも行けるようにするために移動させたようだ。じゃ、海鳴に戻るか。場所は私が寝た廃ビル。

おお、本当に瞬間移動だ。ん？この天気は・・・ヤバイ！このままじゃリンフォースが？公園に急ぐぞ！

十分後

見つけた！ヤバイ！もうはやてちゃんが来てる！

「コラー！ー！！なにをやってるんじゃない！ガキ共！ー！！」

「あ！あなたは！」

「おい！そこの生真面目！」

「わ、私か？」

生真面目は私がそう思ってるからだ。

「そつだよ！なに消えようとしてるの！」

「主のためにも「ええい！なにを言っている！主のためにも残るべきだよ！」しかし、私の体はもう治らない。」

「だったら私が治す！」

「バカな不可能だ。」

「いいからこつちに来なさい！」

「わ、わかった。」

「フー、どうにかなったー。よし！ぶっつけ本番だけどやって見せる！」

「えい！」

強引に唇を奪う。おお、柔らかい！

「！！！！」 リインフォース

「ふ、ふえええー！」 なのは

「お、女の人同士で！」 フェイト

「は、破廉恥な！」 シグナム

「な、ななな。」 ヴィータ

「・・・」 ザフィーラ

「え、えーと。」 シャマル

「こ、これは！・・・ええな。」 はやて

「おーおーみんな赤くなっているなー。・・・はやてちゃんだけ眼をキラキラさせてるけど。よし、もう大丈夫だ。」

「プハー、イチゴみたいにおいしかったー。」

「な、な、ななな、わ、私の初めてが！」

リインフォースって初めてだったんだ。

「あー、ハイハイ、責任ならとるから。あと、体なら治っているよー」

「そ、そんなバカな！ん？た、たしかに治っている！そんな事が！」

「ホンマなん！？リインフォース。じゃあ、これですつと一緒にいられるんやな！」

「おーおー、感動だねー。さて、お邪魔虫は帰るかー。」

「家族水入らずのようだし、私は帰るよ。」

「え！ちょっと待ってください！」

「ダメ。じゃあねー。」

再び廃ビルに転移。

第三話 またチートな・・・(後書き)

今回！が多いな。あと、短い！

第四話 無限の欲望(前書き)

あの変体(?) 博士が出てきます。

第四話 無限の欲望

諸君、私だ。今スカリエッティが目の前にいる。え？展開が急すぎる？よし、説明しよう。

三時間前

廃ビルからまたミッドに転移したのだが、なんと目の前にトーレが！任務か？

「貴様！何者だ！」

「通りすがりの魔女。」

「なんだと？ふざけるな！」

「別にふざけてないよ。ていうか、そっちこそ何者？」

「私はトーレだ。そっちこそ名を名乗れ。」

「私はアルトリア・ブリュンスタッド。悪魔と契約せし魔女だ。」

「悪魔など存在しない。いい加減にしる。それに貴様を生かす理由は存在しない。悪いがここで死んでもらうぞ。ハア！」

ISを使い斬りかかるトーレ。ふむ、なかなかのスピードだ。でも、私には見えるんだよねー。だ・か・ら、

「震碎拳！」

「グハ！そんなバカな！」

軽く一撃。また立ちあがろうとしてるけど、無理だろうね。原作ではスバルの振動破碎はナンバーズの天敵だったから私の震碎拳も同じはず。

「グ、バカな。内部の部品にまでダメージが！一体どうやって。」

「簡単だよ。拳を振動させれば体の内側にも攻撃できる。」

「バカな、拳そのものを振動させるなど、人間技ではないぞ！まさか本当に魔女だとしても言うのか！」

「だから最初から言っているでしょ。で？どうするの？その体で戦うつもり？死ぬよ。」

「グ、私h「トーレ、そのぐらいにしなさい。」！？ドクター！」

出たー！変体博士。というか、最初から見てたのか？

「今の君の体では死に行くようなものだ。ゆりかごを浮上させるためにも、君には生きてもらわねばならないからね。ああ、それから任務の方はチンクが向かっているから問題ない。」

「・・・わかりました。」

「よろしい。では、そちらの方。よろしければ私のところに来てい

ただけないでしょうか？」

「目的は？」

「あなたのあの力について聞くためですよ！先ほどの攻撃、人間技ではない。ぜひ、お聞かせ願いたいですね。」

「うーん、そうだなー、特に行く当てもないし、別にいいよけど。」

「本当かね！ではウーノ、ただちに転送を！」

「わかりました。ドクター。」

そして冒頭に至る。

「やあやあ、よく来てくれたね。はじめまして。私の名はジェイル・スカリエティ。」

「こちらこそはじめまして。アルトリア・ブリュンスタッドだ。」

「うむ。君と色々と話したいが、今はトーレの治療を優先させてくれ。」

「別にいい。じゃあ、そこいらにいるから終わったら声をかける。」

そう言い、近くななぜかあった椅子に腰かける。さて、そんなに直ぐには終わるはずはないし、寝るか？いや、寝たらその間に色々調べられる。うーん、どうする？

「やあやあ、待たせたね。」

「！早！！」

「フッフ、君と早く話すために急いだのさ。」

「恐るべし！無限の欲望！！せいぜい二十分程度しか経ってないぞ！！・・・ギャグ補正？」

「では、色々と聞かせてもらおう。」

「いいよ。じゃあまず最初に私の能力から。聞くよりも実際に見た方が早いから軽くやらせてもらうけど、ここの強度、大丈夫？」

「ああ、問題無いよ震度7の地震が来ようがビクともしないよ。」

「あつそ。じゃあやるよ。おりゃ！」

とまあ、大体震度3ぐらいの地震を起こす。

「こ、これは！まさか、地震を発生させたというのか？」

「その通り。私はグラグラの実を食べた地震人間。これぐらいじゃないよ。」

「グラグラの実？」

「そう。ある世界で見つけた五つの果実の一つ。もつとも、食べたあとに私が付けた名前だけだね。」

「なるほど、その果物を食べて手に入れた力か。ふむ、その果実、

「今も持っているのかい？」

「うん、四つともあるよ。」

「頼む！ぜひ研究させてくれ！」

「別にいいよ。ただしひとつだけ。それでもいい？」

「ああひとつでも十分だよ！ウーノ、ただちに実験の準備を！」

「まあ、あんた本人が食べるもよし。ナンバーズに食べさせるもよし。どうつかうかは自分で決めな。じゃあ、私はこれで。」

「ああ待ちたまえ。せっかくだから私の連絡先を覚えておくよ。」

「そりゃどうも。それじゃ、これにて。」

再びミッドに転移。さーて、こっちではどこで寝るかなー。

第四話 無限の欲望（後書き）

ハイ、というわけでスカリエッティ側に悪魔の実をひとつ渡してみました。なんの実かは、そのうちわかります。

第五話 炎（前書き）

オリキャラ登場です。

第五話 炎

私は今、火事の中を進んでいる。なぜこうなったか……。それは三十分前にさかのぼる。

三十分前

「あー、暇だー。」

諸君、私だ。今ある無人世界にいる。どうやって来たか？ご都合主義だ。気にしたら負けだ。それはともかく、私はすごく暇なのだ。

「うーん、特にやりたい事があるわけじゃあないし、かと言ってなのはちゃん達の所に行ってもKYククロノがうるさいだろうし、スカリエッティの所だと悪魔の実の事について根掘り葉掘り聞かれるだろーなー。うーん、どうしよう。」

だーちくしょー。退屈は毒だと誰かが言ったが、本当だな。

「あー、なにか起こらないかな。ん？あっちの方、煙があがっている。なんだろ。よし！行ってみよう！」

うーん、なにかの事故かなー。ま、行けばわかるか。

そして今に至る

「ひどい熱だ。こりゃ人がいたら全滅かな？それにしても無人世界にある建物なんてせいぜい違法研究所くらいか。となると、実験の失敗か。」

うーん、なにか資料でも残っていればいいけどこの火事じゃ全部燃えてるか。いや、そういう資料こそ金庫にでもしまっただろうかな？まあ、どっち道火が収まらないと分からないか。

「となると、どこかで火が収まるのを待つとするか。」

雨でも降ればすぐに収まるけど、そうそう降るはずもないか。ん？

「なんだ？向こうの方、あんまり燃えてないな。耐火構造にでもなってるのかな？となると、生存者がいる可能性もあるな。行ってみよう。」

まあ、研究員とかだったら殺すけど、もしも実験対象だったら助けないと。ん？

ザシユザシユグチャグチャ

「なんの音？」

少なくとも、人が出すような音ではないね。・・・嫌な予感がする。

私は早足につくと、そこにいたのは、

そこには、一人の少女がいた。金色の足元まで届かんばかりの長

髪を血に染めていた。そして少女の周りには、切り刻まれた死体が散乱していた。格好を見る限り、研究員のようだ。そして少女は今も死体を切り刻んでいる。だが、ナイフを使っていない。否、ナイフどころか、手にはなにも刃物を持っていない。素手で切り刻んでいる。

「えーと、たしか、心臓を斬ると血がたくさん出るはず。えい！」

少女は手を手刀にし、心臓を斬った。当然ながらそうすれば血が吹き出る。

「わー。たくさん出たー。すごいすごい。ん？お姉さんだね？」

どうやらこちらの存在に気付いたようだ。

「ま、いつか。切り刻んじゃえば同じだし。」

「！……！」

「そーれ！」

少女はいきなりジャンプすると斬りかかってきた。それをとっさにエクスカリバーで受け止めるが、

「！？なぜ手が無事なんだ！？」

少女の手は斬れるどころかまったくの無傷だった。そればかりか鉄同士がこすれあう耳障りな音が響いている。

「えへへ。私の手、なんでも斬れるの。そういえばガス管ていうの

を斬ってみたなら爆発したけどなんで？」

「!?!?!」

この子、狂っている。常識というものがまるでない。実験の影響が脳に現れた？とにかく、殺すわけにはいかない。気絶させないと。

「おりゃー!」

「えい。」

「グア!」

左足で蹴りを放つが少女は左手で受け止める。当然、手刀でだ。それにより、足を切断され、バランスを崩されてしまった。

「えへへ、バイバイ、お姉さん。」

遠慮なしに体を切り刻まれる。そして、満足したのか、私から離れる。

「うーん、もう斬るものがない。どうしよう。」

「・・・そう、だったら斬らなければいいんじゃない?」

「え!?!?」

私が無傷で立ちあがるのを見て、さすがに驚いているようだ。

「フフ、私は不死身なの。だからいくら斬っても無駄だよ。」

「ふーん、じゃあ、私を連れて行って。」

「え？」

突然、頭を下げお願いをしてきた。というか、そんな事を頼めた
口か？

「なんでまた？」

「えへへ、あなたなら私といっても死なないから。」

ああ、そういう事か。要するに私がいくら切り刻んでも死なない
からか。そうすれば一緒に行動ができるというわけか。

「もしかして、一人ぼっちなの？」

「うん。誰か来てもすぐに斬って殺しちゃうから一人だよ。」

「ふーんそうか。なら私と来てもいいよ。」

「やったー。」

このまま放っておくわけにもいかないし、私と一緒になら人を斬ら
ないように見張る事もできるか。

「そういえば、名前は？」

「ない。でも、斬り裂き少女とは言われてた。」

「そう。なら、私が名付けてあげる。」

うーん、どうしようかなー。この子の特徴は金髪・手が斬れる・よくわからない・それぐらいか。んー、・・・そうだ！

「サイジョウウエンキ西条炎斬ってどう?」

「それでいいです。」

即答。どうやらどうでもよかったようだ。

「そう、じゃあ、炎斬。この果物を食べなさい。」

「ハイ、わかりました。パクパク、モグモグ。ゴックン。おいしいです。」

なんでわざわざ擬音を口でだすんだ? まあ、気にしないけど。

「それじゃあ、手に力を込めてみて。」

「わかった。おお。」

炎斬の手からは炎が出た。私が食べさせたのはメラメラの実。ぶつちやけ周りが火の海だから決めたんだけど。

「さーて、炎斬。とりあえずあなたの体を調べるために知り合いのところに向かうよ。」

「ハイ。」

スカリエツティならなにかわかるだろう。私と炎斬はその場から
転移した。

第五話 炎（後書き）

なんだかグダグダに・・・。

第六話 蟲・蟲・蟲（前書き）

今回は原作キャラ（敵キャラ）魔改造の巻です。

第六話 蟲・蟲・蟲

諸君、私だ。あのあと近くの有人世界でスカリエッツィに連絡をとり待ち合わせ場所に向かっている。

「えーと、たしかこのあたりのはずだ。」

私達は今郊外の森に来ている。ここが待ち合わせ場所だからだ。

「アルトリア様ー。ここの木切っていいですか？」

「ダメに決まっているだろ。我慢しろ。それから、これから行くところなら斬るものがたくさなるはずだから我慢なさい。」

「ハイ。」

やれやれ、炎斬にはむやみやたらに斬らないようにするための暗示でもかけるべきかな？うん、そうした方がいいだろう。スカリエッツィに頼もう。

「ハイ、お待たせしましたー。」

むむ、どうやら迎えに来たのはクアットロのようだ。

「はじめまして。クアットロです。」

「クアットロ、という事は四番か。」

「ハイ、そうです。では、早速ドクターのところまで行きまーす。」

そして転移。

「ハリー、とうちゃーく。」

「ありがと。では、早速スカリエッティにあうとしよう。炎斬、来なさい。」

「ハリー。」

そして歩く事十五分、スカリエッティを見つける。

「やあ、久しぶりという程ではないね。魔女よ。」

「そうだなスカリエッティ。では、いきなりだがこの子について検査を頼む。」

「ああ、準備は既に済ませてあるよ。そこの台に乗ってくれ。」

「ハリー。」

「では、我々はその間に別の要件を済ませよう。」

「そうだな。で？その要件とはなんだ？」

電話口でも言っていたが、何の事なんだ？・・・なにか嫌な予感がするのは気のせいだろうか？

「ふむ、とりあえず私についてきてもらいたい。話は歩きながらで

「

「わかった。」

そうして歩く私達。そして、少し歩いたくらいから口を開くスクリエッティ。

「要件というのは、君からもらったアレの事だよ。」

「ああ、アレか。それで？どうしたんだ？」

「うむ、実は一通りのデータがとれたあとでせっかくだから誰か食べるかという話になったのだよ。」

「フムフム、それで？」

「それでナンバーズV、チンクが自ら志願して食べたのだよ。」

なんと！チンクが！原作キャラの中でも私が特に好きなキャラの一人のチンクが！うーむ。

「なるほど。で？その子は？」

「うーむ、それがどうも食べてから虫の事についてあれこれ言うてくるようになったのだよ。」

ここで彼には珍しい困った表情を浮かべる。そういえば、あげた実は……

「あー、多分能力が虫に関するものだったからじゃないか？」

「その通りだよ。実際、体から無数の虫を出していたよ。アレにはさすがの私も驚いたよ。」

そう、私があげた実はムシムシの実。ぶつちやけ適当に渡したがこうなるとは。そういえば、能力の詳細は特に決めていなかったが、どうなんだ？

「ふーん、なるほど。それで？私にどうしろと？」

「なに、簡単な事だ。あの子は能力を制御しきれないところがあ。その制御の仕方をあの子に教えてもらおうと思ってる。」

「別にいいけど？もともとは私が蒔いた種だしね。自信はないが、やってみよう。」

「たすかるよ。ああ、ちょうどついたよ。ここがチンクの部屋だよ。」

「そう。じゃ、炎斬の検査よろしくね。」

「ああ、こっちの方は任せるよ。」

そう言い、戻っていくスカリエッティ。さて、私は私のやる事をやるとしよう。

コンコン

「開いているぞ。」

「そう、じゃあ失礼するよ。」

とりあえずソックスをして部屋に入る。そして、

「お前が魔女か。」

おお！アニメ通りのロリ体系のチンクが！ん？なんかこの部屋変な臭いが。

「ああ、臭かったらすまない。それは姉の子供たちにおいだ。」

「え？子供がいるの？その体で？」

「小さくてわるかったな！」

うーむ、やはり気にしてるのか。でも、ロリなのがチンクの持ち味なのだよ！

「ハハ、冗談だ。既に話は聞いている。まずは能力を見せてもらおう。」

「ああ、わかった。」

そう言うチンクが見せたのは、

蟲・蟲・蟲・蟲・蟲。おびただしい数のさまざまな種類の虫がシエルコートの袖から出てきている。

「おやおや、スゴイ数だね。この鼻にくる臭いはそれが原因か。」

「ああ、だが姉にとっては最高の香りだよ。」

「それで？話によると制御できないそうだが？」

「ああ、実はこうしてこの子たちを出す時の数を制御できないんだ。」

「なるほど。それは問題だな。」

「しかもこいつら生まれる時に姉の体力を奪っていく。だからすぐに姉が倒れてしまうよ。」

「ふーむ、それは困りものだな。」

「うーん、原因はなんだ？……ん？もしかして！

「ひとつ聞くが、生み出す時にその数を決めているか？」

「いや？そういえば特に数を決めているわけではないが？」

「多分それが原因だ。数を具体的に決める必要があるんじゃないか？」

「なるほど。じゃあ早速試してみよう。とりあえず、五匹だ。……
おおー！」

シエルコートの袖から出てきたのは五匹の蝶だった。どうやら正解のようだ。

「なるほど。数を決める必要があるのか。」

「そうみたいだね。ところで、この虫達はいつまでいるの？」

「ああ、そのうち力尽きる。そうなたらすぐに消えるよ。」

「そう。じゃ、次は生み出せる虫の種類についてだ。」

この能力の実験は深夜まで続いた。

第六話 蟲・蟲・蟲（後書き）

チンクファンの方ごめんなさい。

第七話 解析

諸君、私だ。寝不足だ。チンクの能力について深夜まで話してしまつたよ。それでは結果を報告しよう。

・ 生み出す虫の数を決めておかないと大量に出てくる。

・ 生み出す虫は能力者が知っている虫だけ。そのため実在しないマンガなどに登場する虫も名前と特徴を知っていれば生み出せる。

・ 生み出した虫は最大三時間はもつ。

・ 生み出すとき体力を必要とする。

・ 能力者の意識が消えると虫はすべて消滅する。

大体こんなところだ。まあ後はチンクが自分でどうにかしなければ意味がない。

「いや、助かつたよ。これで彼女も倒れる事はなくなるだろう。」

「そりやどうも。それで？そっちの方はどうだったの？」

「うむ、実は私もどのような研究をやっていたのか気になってトーレを調査に向かわせたが・・・」

「向かわせたが？」

「ほとんど燃えてしまつてね。たまたまデスクの下などに入っていたのがかろうじて読める程度だったよ。だが、どのような研究をやっていたかはわかつた。」

まああの炎じゃ無理もないか。

「ふーん、どんな研究なんだ？」

「どうやら魔力の永続的な物質化の研究のようだ。それにより造られた強固な鎧をもつ意思のない軍団を造ろうとしたようだ。あの子があんな風なもの、そのために脳を弄られたのが原因だろう。」

「じゃあ炎斬が色々斬れるのはそれにより造られた魔力刀のせいか。」

「その通りだよ。ただし手刀の形にした時だけだがね。」

「そうか。ありがとう。」

「いやそれはこちらにも言える事だよ。それから君から頼まれた暗示だが、なにぶん専門外だからちゃんと出来たか不安だがかけておいたよ。」

「そう。じゃああと二つほど頼むけどいい？」

「構わないよ。そのかわり少々私の手伝いをしてもらうが？」

「別にいい。私は管理局があまり好きではないしな。」

脳みそがトップの組織を好きになれという方が無理な話だよ。

「それで？頼みとはなにかね？」

「私達がしばらくいる事と、炎斬に教育をする事だ。」

「ふむ、わかった。手配しよう。ただし教育の方はさすがに学校で習うような範囲を教えるのは無理があるが？」

「わかっているさ。それでもせいぜい一般常識程度はどうにかしてくれ。」

ぶつちやけそうしないとあの子の将来が不安だ。

「それぐらいならどうにかなるだろう。では、部屋を用意させるよ。」

「そう。それじゃあ用意できたら知らせて。私はそこら辺で寝てるから。」

正直眠いよ。では、お休みなさい。

第七話 解析（後書き）

やっぱりグダグダだ・・・

第八話 一年後（前書き）

一週間ぶりです。

第八話 一年後

諸君、私だ。あれから一年たった。なに？展開が早すぎる？作者の文章不足のせいだ。気にしたら負けだ。でだ、今私はレリックを探している。これがなかなか見つからないのだ。

「うーん、反応はこの辺りのはずなんだけどなー。地中にでもあるのか？」

やれやれ、スカリエツィの頼みで何度もやっているがまた面倒な事になっているなー。とりあえず、無人世界だしでかい音を出しても大丈夫だろう。よし、某黄金王の真似でもやってみよう！

「『ゲイト・オブ・バビロン王の財宝』！」

あまたの聖剣魔剣が地面を抉っていく。うーん、これはなかなか爽快だな。

「お、あの赤いだな。傷は・・・無し無いな。さて、炎斬を回収して帰るか。」

そうそう、この一年間の事を報告しよう。まず炎斬だがこの一年でだいぶ能力を制御できるようになった。技はそのうちわかるだろう。なんでもかんでも斬りたがるあの衝動だが暗示で抑えているが時々無人世界で暴れさせて発散させている。ちなみに最近背が伸びている。チンクよりでかくなってチンクを落ち込ませていたよ。そのとうのチンク本人は昆虫図鑑をよく読んでいる。無論、能力のためだ。最近では一度に百種類の虫を生み出せる。

「ジェイル、見つけたぞ。炎斬を回収したらすぐに戻る。」

「了解した。では待っているよ。」

ちなみにいつの間にか私は彼をジェイルと呼ぶようになっていた。いつの間にかそうなっていたよ。断じて作者がいちいちスカリエツティと打つのが面倒だからではない。

「アルトリアさま。」

「ん？どうした？」

炎斬を探す手間が省けたようだあっちから来たよ。しかし、どうしたんだ？

「えーと、なんか穴に炎を放り込んだらマグマがでたんですよ。」

おい、待て。

「・・・まさか、山の頂上にある穴じゃないだろうな。」

「ハイ！その穴ですよ。」

オイー！なんてことを！そつえばさっきから熱いと思ったが、こいつのせいか！

ドオオオーン ドーン

「噴火したー！ええい、とにかく逃げるぞー！」

「ハイ。」

まったくこれで二度目だ。

第八話 一年後（後書き）

短くてすみません。

第九話 少女を拾う

諸君、私だ。今生き倒れの少女を見つけた。何故かというと・・・

一時間前

「あゝ暇だ〜。」

暇すぎて死にそうだ。炎斬とチンクは任務でいないし、他の連中もやる事があるそうだ。だから私は暇だ。どうしよう。

「よし！久しぶりにミッドに行こう！」

さーで、善は急げだ。転移！そしてあちこちブラブラ。裏路地に入る。そして今に至る。

回想終了

「はー、なんでこんな所に生き倒れがいるのやら。」

一応脈をとる。フム、生きてはいるようだ。しかし何故生き倒れているんだ？ん？

グ〜

「腹が空いてるだけかい！」

いや待て。落ち着け私。そうだ、素数を数えよ

「あの、なにか食べ物を……」

「ん？食べ物なら確かリンゴがあったはず……おお、こ」「いただきます！」「うお！」

びっくりしたー！リンゴを出した途端に飛びかかってきたよ。よっぽどお腹が空いていたのか。ん？今この子が食べているのって……

「しまったー！間違えてヒエヒエの実を出してしまったー！」

「はわー！ー！な、なんですか！？」

ああああ、どうしよう。とりあえずこのまま放置するわけにもいかない。ひとまずアジトに連れて行くしかない！だが、その前に、

「お譲ちゃん、家族は？」

「……いない。お父さんもお母さんもお姉ちゃんも三人とも管理局の人だったけど同じ局の人に殺されちゃったから……」

……どうしようこの空気。すごい重い話だよ。しかし、同じ局の人にか。多分出世を考えている奴が邪魔になると考えての行動だろう。つくづく腐敗した組織だよ。というか、このまま放っておいたらこの子は殺されるだろう。なら、

「お譲ちゃん、私の所に来る？」

「え？」

「私の所には同じぐらいの年の女の子がいるよ？それに、このままだとお譲ちゃんは殺されるだろうし、損は無いと思うけど？」

「・・・ハイ！行きます！」

「よろしい。さて、そこに隠れている人、出てきたら？」

「オイ！気付かれてるぞ！」

「しかたねー。あの女も殺すぞ。」

フム、5人か。楽勝、楽勝。

「震碎拳！」

「くくくくくあああー！！」「」「」「」

ハイ、弱い。まあ、私にかなう奴なんて局にいるわけ無いけどね。

「さ、行くつか。」

「ハ、ハイ！」

うーん、可愛い子だ。蒼い髪と瞳の炎斬より小柄な体躯。なかなかだ。

「そういえば、名前を言ってなかったね。私はアルトリア・ブリュンスタッド。」

「ハ、ハイ、私はアリス・フリジングです。」

「そう。良い名前だね。じゃあ、行くつか。」

「ハイ！」

さーて、とりあえず当分暇にはならないだろうな。

第十話 墓に魔女は現れる(前書き)

今回原作キャラが魔改造されます。ご注意ください。

第十話 墓に魔女は現れる

諸君私だ。今墓地に来ている。なぜかって？ティアナに会うためだ。現在葬式の途中なのだが、あの上司っぽい連中には腹が立つ。死者を冒瀆しおって虫酢がはしる。そういう自分達はどんなんだ？自分達なら出来たみたいにいいやがって。とりあえず、殴る事にした。

「目障りだ。気絶してる。」

ドン！ボカボカ！

「へ？なにが？」

「大丈夫？お譲ちゃん？ああそうそう、君のお兄さんを悪く言った奴は私が気絶させてそこらに放り投げておいたから。」

ちなみにその時神父さんも放り投げたのは秘密だ。

「あ、ありがとうございます！」

そう言っって頭を下げてくつティアナ。うーん、礼儀正しい子だ。

「別にいいって。私がやりたいようにやっただけだって。そういえばお譲ちゃんの名前は？」

「あ、はい。ティアナ・ランスターです。」

「そう。私はアルトリア・ブリュンスタッド。魔女だ。」

「魔女？」

「そうだよ。ところで、ティアナ。君に聞きたい事がある。さっき君のお兄さんを悪く言われた時、悔しくなかったかい。」

「……はい。悔しいです。なんで兄さんがあんな事を言われなくちゃいけないんですか！なにも悪い事してないのに！」

うん。だろうね。家族をそんな風に言われればそう思うのも当然だ。

「じゃあ、そんな事を言った連中を見返したくないかい？」

「それは……。でも、私にはそんな力は……」

「じゃあ、取引しないかい？」

「取引？」

「そう。取引すればティアナはすごい力を手に入れる。だけどその代償にティアナの運命は大きく変わってしまう。それでもやるかい？」

私がそう言うとしばらく考え込むティアナ。そして、

「その取引、受けます！」

「そう。ならばこの果実を食べなさい。」

私はイヌイヌの実を取り出す。最後の悪魔の実だ。

「はい。えーと、まるごとですか？」

「もちろん。食べ物は粗末にしちゃいけないよ。」

「わかりました。．．．う、酸っぱいです。でも、我慢。」

うーん、形がレモンのそれだから酸っぱかったのか？

「よし。全部食べたね。じゃあ、心の中で力を使いたいと思ってみて。」

「はい。．．．．．わ！なんか尻尾が！」

ティアナのお尻からはそれはもう鮮やかな九本の金色の尻尾が生え、頭からは犬（狐？）耳が生えていた。．．．正直、可愛い！可愛過ぎる！

「こ、これが私の力．．．。」

「そうだよ。でも、その力を使いこなせるかはティアナの次第だよ。」

「は、はい！あ、それからー。」

「ん？なに？」

「私は管理局に入ってもいいですか？そのー、兄さんの夢だった執務官になりたいんです。」

「別にいいよ。ただし、そうするんだったら約束をしてもらわないといけない。」

「約束？」

「そう。まず第一に力の事を隠す。だれにも言ってはいけない。たとえ信用できる友人でもね。二つ目は力の使い方は自分でどうにかする事。以上。」

ぶつちやけ一つ目はティアナを守るためだ。上層部に知れたらどうなるかわかったものじゃないしね。二つ目は私があればこれ言わなくてもティアナなら自力で強くなっていけるだろうと読んだからだ。

「大丈夫です。絶対ばれないようにします！」

「そう。じゃあ私はこれで。」

「はい！ありがとうございます！」

「じゃーねー。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9996m/>

魔法少女リリカルなのは 魔女は悪魔と共にあり

2010年10月13日04時06分発行